

「今後の県立高校に関する意見交換会（第2回）」記録要旨【両磐ブロック】

平成27年10月22日（木）

一関第二高校 大講義室

【一関市 参加者】

- ・ 地方創生の中、学校を減らすことは相反することである。国立、私立、公立高校を踏まえ、地域の学校の在り方を考えていただきたい。

【県教委】

- ・ 地域検討会議でも地域にある学校を十分考えたうえで検討して欲しいとの意見があった。県立高校については県が設置者として検討しているところであり、私立についてはそれぞれの設置者が判断すべきものであるが、生徒減の状況等情報共有しながら意見交換しているところ。

【一関市 参加者】

- ・ 一関市は8市町村が合併した経緯もあり、高専、私立高校が旧一関市内に集中していることを踏まえ、公立高校の設置場所について検討していただきたい。

【一関市 参加者】

- ・ 資料No. 4に校舎制があるが、地域から高校を無くさないということから興味を持っている。山口県の事例があるがその他にもこのような事例があるのか。
- ・ 校舎制のメリット、デメリットを教えてほしい。

【県教委】

- ・ 今回は山口県の事例を示しているが、他県においても校舎制の事例はある。
- ・ メリットとしては校舎が残るため、それぞれの校舎で授業を受けられる。統合の形態として普通科同士では本校、分校という形になりかねないので、専門学科と普通科、または専門学科同士で考えており、それぞれの専門性を生かし幅広い進路選択が可能になる等がある。
- ・ デメリットとしては、一つの学校としての運営とするとき、お互いの校舎での連絡調整、意思疎通が難しいこと、校舎間の移動手段等が挙げられ、対応を考えていかなければならない。

【県教委】

- ・ 校舎制については三重県でもやっている例がある。校舎制という名称で本校、分校の形態になっているところもあるが、そのようなところとは異なり、一つの学校として機能させるというところを進めたいと考えている。

【一関市 参加者】

- ・ デメリットとして学校運営が挙げられたが、教員の工夫で対応できると思う。各校舎間の移動にバスを使うのであれば、そのバスを通学に使用することで希望する別の学科の校舎へ移動させることで通学の面でもメリットがあると思う。

【県教委】

- ・ 高専、私立、公立を含めた再編を考えてほしいとの意見があったが、具体的にどのような再編をイメージしているのか話してほしい。

（次頁に続く）

【一関市 参加者】

- ・ 一関の場合、私立、高専、公立を合わせると9校ある。これらの学校が偏在している。1校ぐらいは花泉地区にあっても地方創生の面からいいと思う。地域のことも考慮する高校の在り方が必要かと思っている。合併に伴って学校も旧一関市に集中してきて、合併の意味が無くなってきている。

【一関市 参加者】

- ・ 中学生にアンケートをとったということであるが、説明の通り中学生の希望にはあやふやな部分がある。保護者にはアンケートを取ったのか。
- ・ 前計画の統合基準の見直しということであるが、久慈市では八戸市に行っていた生徒が、バブルがはじけたことによる経済的理由で久慈に留まるようになったという話を聞いた。進学先を決定する理由は経済的な面を含め様々あり、2年間の入学者の状況を基準として統合等を行うことは難しいと感じている。

【県教委】

- ・ 基本的方向を改訂する際に平成20年12月にしかアンケートを取っていないという指摘があり、検討のため緊急にアンケートをとったものである。前回のアンケートの時期は12月で入学願書を提出する時期であるが、今回は7月の時点でこれから三者面談の時期であり、まだ若干希望が定まっていないところはあると思うが、アンケート結果をみると近年の入試の応募状況とかなり近接した数値となっている。
- ・ 保護者について、地域検討会議ではPTAの代表という形で地域代表として、保護者の意見も努めて伺うようにしている。そのような場に中学生や高校生を呼んで意見を聞くことはできないので、こういったアンケートを行った。保護者に関してはアンケートという形でやらないが、努めて保護者の意見も踏まえながら検討を進めていきたい。
- ・ 統合の基準の関係では前計画の基準には地元からの入学割合があったが、今回の計画では地元からの入学者割合を要件にすることは現実的ではないと考えている。しかしながら、学校規模としてあまりに小さくなった場合についての基準については考えていかなければならない。

【一関市 参加者】

- ・ 保護者の経済状況によって生徒の動きも変わるので、生徒が少なくなったからすぐに学校を閉校するのでは対応できなくなるということもあり、そのような社会情勢もあることを考えながら再編を行っていただきたい。
- ・ 以前釜石に住んでいたが、震災の際には釜石高校が避難所になったので校舎が残って運営していることが大切なことがある。県の施設であるが市からの要請で釜石高校は受け入れたらしいが、地域的に復興をする場として必要な時があるので、通学できるから再編という考え方はしてほしくない。

【県教委】

- ・ 高校は義務教育ではないので経済的事情への対応については奨学金での対応となるが、再編によって学校へ通えないことがないように考えていかなければならない。
- ・ 避難所としての活用については、教育環境の確保、整備としての提案かと思うが、直接再編では対応できないかもしれないが御意見として承る。

【県教委】

- ・ 生徒にとって望ましい教育環境を考え、ある程度の規模が必要だということと考えていることを御理解いただきたい。

(次頁に続く)

【一関市 参加者】

- ・ 資料 No. 1 には「望ましい学校規模に満たない規模であることのみを理由として再編の対象にはしない。」とあるが、1 学級でも規模を満たしているということであるのか。
- ・ （「通学が容易な地域において」は通学はできる。）花泉から一関に行くには定期を購入しなければならないが、電車で通えるから容易ということになるのか。

【県教委】

- ・ 「望ましい学校規模に満たない規模であることのみを理由として再編の対象にはしない」という考え方は持っているが、学校規模が小さくなることで進路選択や部活動における課題も出てくるので、通学が著しく困難な場合は教育の機会の保障の観点から、特例として存続させることも検討している。
- ・ 機会の保障ということでは、高校が無くなることで他の高校にも通うことすらできなくなるということがないような地域かどうか、見極めなければならない。
- ・ 通学が極端に困難な場合については、中学生のアンケートでは概ね 7 割が通学時間 1 時間以内を許容しているということ、国が小中学校の統合を考える際の基準として小中学校の通学時間は 60 分を基準と示していることや、公共交通機関の状況等様々な観点から考えていかなければならないので、通学費がかかるから困難とするものではない。
- ・ 近隣に高校が存在し、それ以外の高校への通学が容易な地域ということについては、地域の実情も十分考慮し統合も視野に入れながら検討は必要と考えている。

【一関市 参加者】

- ・ 1 学級は望ましい学校規模に満たない範囲に入るのか。

【県教委】

- ・ 4 から 6 学級が望ましい学校規模であるので、満たない規模は 3 学級規模以下であるので該当する。ただし、規模に満たないことだけを理由に再編の対象にはしないということである。小規模になる場合の課題には教育の質の確保があるが、通学が著しく困難な場合は機会の保障からの特例の扱いを考えているところ。通学が容易な地域については統合も視野に入れて考えていく必要がある。

【一関市 参加者】

- ・ 花泉高校は 40 人が定員であるが、平成 27 年度は花泉中学校の卒業生が少なかったものの、平成 28 年度には卒業生が 20 人程多くなる。平成 27 年度は 37 人が花泉高校に入学しているが、平成 28 年度は 40 人しか入学できないのか。

【県教委】

- ・ 両磐ブロックの平成 28 年 3 月の中学校卒業生予定者は 35 人増えるが、平成 27 年度入試ではブロック内で 87 人の欠員を生じており、ブロック全体では 35 人増への対応は可能と考えている。
- ・ 基本の募集定員 40 人でも若干名 40 人を超えて入学となる場合もある。

【一関市 参加者】

- ・ 今回の提案での「望ましい学校規模に満たない規模であることのみを理由として再編の対象にはしない」という考え方や、通学困難地域という考え方を明確にし、教育の機会の保障という観点で例外的処置をとるとしたことも良いと思う。
- ・ 校舎制について新たに示したことも良かったと思っている。

(次頁に続く)

- ・一関市は合併して約10年であり、中心部への集中が進んでいると感じる。周辺地域が寂れていく中、地方創生を考えた場合、高校は存続していく必要があると思う。
- ・中学生もアンケート結果では、両磐ブロックは理数科、工業、総合学科の希望が高く、これは中学校3年生が進路を意識した傾向が出ており、ある程度の中学生の傾向を見ることができる。
- ・一関市の場合は、私立高校が2校、国立の高専があること、宮城県に接していることを考慮しなければならず他のブロックとは異なる。
- ・近隣に高校が存在し、当該高校以外に通学が容易な地域においては地域の状況等も考慮しながら統合も視野に入れ検討するとあるが、花泉高校を暗に指している気がする。花泉高校は2学級から1学級へ定員を減らしたばかりであり、更に再編の検討をすとなれば、地域的には厳しいものがある。徐々にある程度の統合基準を示しながら検討する必要がある。花泉中学校は今年度卒業生が増えるので、もしかすると定員を超えるかもしれない。その場合、生徒にとっては厳しい選択も考えられるのでその辺も踏まえて検討をお願いしたい。

【県教委】

- ・アンケート結果について実際の入試状況も反映した結果になっていると思う。
- ・私立高校が2校あること等にも配慮し、ブロック全体を見ながら検討していかなければならない。私立に配慮するということは、公立の定員を減らすことになる。高専については広域から入学している。私立を含めると当地区では200人以上定員が多いという状況もあるので、そのようなことも勘案しながら検討していきたい。
- ・再編を進める中では子ども達の学びの環境を守っていくことが大事であり、ある程度の学校規模を維持することで多様な進路への対応ができるため望ましい規模と表現しているが、教育の質だけではなく、地域に学校が無くなることによって、高校に通えないということがないようにしていかなければならず、教育の機会の保障を考慮し、このような記述にしている。そのような観点で見ると通学が容易な地域では統合も視野に入れ検討していかなければならない。

【一関市 参加者】

- ・資料No. 2に東北の1から3学級規模の高校の割合があるが、この広い県土の中で人口の割合等も考えると簡単に減らしていいものではないと思うので、この数値がそのまま参考になるものではないと思う。
- ・旧市町村の東山、室根、平泉にも高校はないが、公共交通機関を考えると藤沢から千厩に行くバス路線とその時間、藤沢から花泉に行くバス路線とその時間、室根からの通学等様々なことを考えるとある程度のところに学校が必要である。地域に小学校も中学校も高校も無くなると、ますます過疎化が進み、そこに住みたい人が全くいなくなると思う。
- ・地方創生を考えると、中学生の人数が増えていくような施策のために高校という位置付けを捉えるということができないか。
- ・地域に子ども達を残し、産業を発展させ、地域で仕事しながら子育てをするというような、次の世代につなげていく手段として教育の位置付けをしてほしい。その中核に高校、中学校を考えていかなければ、ただ時代の流れに乗って学校を減らすという考えでは何にもならない。
- ・創意工夫で、次の100年のことを考え、教育に金をかけなければ岩手県が潰れてしまう。確かに苦しいところであるが、物事を逆転的に発想していくことを地域社会としても考えていく必要がある。

(次頁に続く)

そのような提案を県教委側からもしていただければ、地域の皆さんもやらなければならないと思っていくこともできるのではないかと。

【県教委】

- ・ 通学の状況等、学校間距離等も考えた再編を考えていかなければならないので、西磐井と東磐井は分けて考えていくことは必要と考えている。
- ・ 子ども達を増やすために地方創生での取り組みを各地域で考えていると思うが、中学校卒業者の増については、その取り組みの成果が出るまでに時間もかかるものと考えている。そのため現在の再編計画では今後 10 年の傾向によって、それに対応する学校、規模の配置を考えていかざるを得ない。地方創生の取り組みによって地域事情が変わるようであれば、定員を見直していくことが将来的に必要であると考えている。

【一関市 参加者】

- ・ 藤沢高校が募集停止になり千厩高校に統合になったとき、バスで花泉にも千厩にも通えるだろうとの話があった。現在、花泉と藤沢間の最終バスは藤沢 15 時発であり、実際には公共交通機関では通学できない。例えば以前、花泉高校に平泉町から生徒が通っていた。平泉町からは一関駅で乗り換えをしなければならないことや経済的なこと等を考えると、簡単には統合できない。十分に様々な状況を考えて高校再編をやっていかなければならない。東磐井、西磐井を分けて考えることも必要であり、それぞれの地域のことを考えなければならない。